



四万十町  
町内「ぶらへり」散策

# 西原



西原から国道381号を走り、窪川の街中に入る手前に、コンビニエンスストアやホームセンターが並ぶ大井野の長い直線がある。その直線の右手(南側)の広大な農地の向こうに、山に添って線路が走り、線路に沿って集落が見える。四万十川南岸に位置する西原地区である。

戦国中期以前は「荒谷村」とも「穴谷村」ともいっていたようだ。戦国中期に紀州(現在の和歌山県)の豪族・西原清延がこの地に入り、裏山に山城(＝西原城)を築いた。これにより西原村となる。

清延はその後、新在家村(現在の東又地区内)に移り、清延の子・重助が西原村を継ぐのであるが、度重なる水害に見舞われる。西原地区から対岸の口神ノ川地区へ渡るところに「鶴の巣の淵」と呼ばれる淵があるのだが、その真上辺りに「鶴の巣城」を築いて、そこに居を移すことになる。

幾度の水害は、肥沃な大地をつくってきた。江戸時代に入ると、窪川山内氏の支配下になるのであるが、この肥沃な農地は知行地として重要視されたという。その頃は「才原村」と記されることもあった。現在は34世帯67名がここ西原地区で暮らしている。

さて、地区の西のはずれに「文殊



堀内洗雲作の文殊菩薩

堂」という小さなお堂がある。ここには、樹齢600年余の松の大きな木があった。地区のご神木としても大切にされていたのだ。ところが、昭和53年8月のこと、突然倒木。外観ではわからなかったが、太い幹の根元辺りの腐食が進んでいたらしい。このことは当時の新聞でも取り上げられ、記事を見て胸を痛めたという東洋町の仏師・堀内洗雲氏が、倒れた松の木で文殊菩薩を制作することを申し出て、この文殊堂にこもり何日もかけて彫り上げた。現在もお堂に祀られているその小さな仏像は、細部の表現技術といい、全体のバランスといい、顔立ちの上品さといい、誠に見事な仏像である。

文殊様といえば「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があるように、知恵を授けてくれる仏様として知られているが、人知れず建つこんな小さなお堂にも関わらず、学問成就祈願に訪れる人が相当数いることに驚いた。祈願に訪れた人の願いが綴られた帳面がお堂にある。



現在の文殊堂



松の大きな木があった頃

堂」という小さなお堂がある。ここには、樹齢600年余の松の大きな木があった。地区のご神木としても大切にされていたのだ。ところが、昭和53年8月のこと、突然倒木。外観ではわからなかったが、太い幹の根元辺りの腐食が進んでいたらしい。このことは当時の新聞でも取り上げられ、記事を見て胸を痛めたという東洋町の仏師・堀内洗雲氏が、倒れた松の木で文殊菩薩を制作することを申し出て、この文殊堂にこもり何日もかけて彫り上げた。現在もお堂に祀られているその小さな仏像は、細部の表現技術といい、全体のバランスといい、顔立ちの上品さといい、誠に見事な仏像である。

町のうごき	(8月31日)				(8月中の届出)				適正值(mg/l)	9月7日	
	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出	リン酸				
	男	8,609	-7	男 0	11	17	13	≤ 5.0		0.25	
女	9,603	-20	女 6	13	8	21	≤ 0.5	測定範囲以下			
計	18,212	-27	計 6	24	25	34	≤ 5.0	測定範囲以下			
世帯数	8,655	-14					≤ 1.0	0.35			
							≤ 10.0	測定範囲以上			

● 四万十町ホームページアドレス <http://www.town.shimanto.lg.jp/> ●

※広報「四万十町通信」はホームページでも、ご覧いただけます。(pdfファイル)

調査：大正(吾川)  
資料：四万十高校自然環境部